

金田眞宏 ●滋賀県甲賀市立土山中学校布引分教室教頭

布引分教室は児童自立支援施設「滋賀県立淡海学園」内に併設された分教室である。児童自立支援施設は全国に五十八所あり、そのうち平成十八年度現在で三十一所の施設内に分校や分教室が併設されている。この施設に措置される児童は、児童福祉法第四十四条にあるように生活指導等を要する児童であり、近年は虐待やネグレクト等に起因する者が七割近くを占めている。

施設での教育は、寮舎での規律正しい生活を中心に、作業・クラブ・学習などの活動を基本としている。「早寝・早起き・朝ご飯」をまさに地でいく施設である。学習指導では、まず基礎学力の回復に重点を置き、学習意欲の向上を通して知的な面からの自立支援を行っている。

しかし近年、高校進学希望の増加や授業時数確保のため、基礎学習に充てる時間がなくなりつつある。そこで、再度基礎学習の重要性を再確認し、その目的や授業方法について検討してみた。

自己表現力を高める基礎学習とは

この施設に措置される児童の中には、発達障害と診断されたりその疑いのある児童が七割に及ぶ。また、特別支援学級に在籍していた児童もいる。これに加えて虐待やネグレクトによる人間不信を抱えた児童は、共に概ね対人関係で未成熟という共通点があることがわかってきた。そこで前述の伝統的教育方法に加えて、最近では自己表現力を高め、コミュニケーション能力を育てることで自立支援につなげる試みが始められている。

では、自己表現力をつけるための基礎学習とはどのようなものか。本分教室では、基礎学習の目的を基本的な語彙の習得と、論理的思考の修得と考えている。さらにこれを、できる限り教師と児童の対話の中で取得させようと考えている。

日課の中で割り当てられる時間は制限されているため、「基礎学習」の時間を時間割上に設定し、一昨

年度は週一時間の寮別学級編成で、昨年度は週二時間の無学年到達度別学級編成（四学級）で実施した。内容は国語・数学・英語の三教科を輪番に教師全員で指導した。指導に先立って児童の入所時に三教科の学力検査を行い、学力が欠けている箇所を把握した上で学級所属を決め、定期的に検査や学級再編を行ってきた。また、到達度に対して順位意識や差別感を持たせないように、学級名に動物の名前を用いる等の配慮もした。

学習方法は個々の生徒の能力に応じたドリルを行うありふれたものである。一作年度は無言で取り組ませたが、自己表現力への効果は少なかった。昨年度は到達度別にし、質問や個別指導の機会を持つようにしたため、児童はつまづきや疑問に対して、恥ずかしがらずに納得するまで質問ができた。また、指導者との対話を通して、次第に正確な語彙の意味や、計算方法の正しい道筋がわかってくるようになった。学習が遅れている学級は、複数教員もしくは学園職員がTTで加わり、より個別指導場面を多く持てるようにした。児童の学習意欲が高まる程、指導者は対応に忙しくなった。

この施設の児童は、家庭環境が劣悪であったため家族同士の会話や家庭学習が少なく、学校においても授業を欠けることが多いため一斉授業の中では学力回復が難しかった。それ故、教師との対話による学習を新鮮なものと受け止めてくれる。

昨年度一年間で約四十時間の基礎学習の時間を設けたが、個々の生徒では平均約二割の基礎学力の向上が見られた。また入所当初は単語でしか話せなかった児童が、教師に話しかけたり、人前で朗読できるようになるという変化が現れた。

さらなる個別指導体制や時間増は難しく、逆に個別指導場面の増加は授業規律の確保に影響を与えるという懸念もある。しかし、少ないながらも自己表現力育成のための基礎学習は、十分な効果が期待できる取り組みであると確信している。